寄稿

# 宇和島再訪

明治コンサルタント㈱ 三塚圀彦

今回、愛媛県松山市で開催された全地連技術フォーラムに派遣されたのを機に同県宇和島市を訪れた。

宇和島は私にとって格別な地である。

昭和45年、今から実に30年も前である。

新米の技術屋であった私は、高知県の宿毛市とを結ぶ旧国鉄路線のトンネル調査のために同市に赴いた。（この路線は、その後の世情の変化で結局日の目を見なかった。）

海を見下ろすミカン畑で地質調査（弾性波探査）を行ったが、発破の震動で丁度収穫期の伊予カンなどがばたばたと落下し、当然の事ながら所有者にそれらの買い取りを要求されたため、仕事の合間を見てはせっせとミカンを食べた。

おかげで10日くらい経つと、顔がミカン色になったと人夫さんにからかわれたほどだった。

一夕、宿舎近くの縄のれんをくぐり一人で飲んでいると、隣に座った50歳前後のおじさんが話しかけてきた。

「オ主ハ何処カラ来タルヤ」

「東京カラナリ」

「出身ハ何処カ」

「センダイナリ」

「奥州センダイ（仙台）、薩摩センダイ（川内）、イズレゾ」

「奥州仙台ナリ」

「オー、オ主ハ伊達本家ノ方デアルカ」

不勉強にして私は宇和島がもう一つの伊達藩であったことを知らなかったし、こだわる程の家柄では無い事もあって先祖が伊達藩の空気を吸っていたなどと意識したことは無かった。

伊達政宗は長男秀宗を豊臣秀吉に養子格（人質）として差し出したが、秀吉の後を襲った徳川家康はその扱いに困惑し、仙台に戻さずに伊予国に宇和島伊達藩として10万石で封じた事などをおじさんの説明を聞いて初めて知った。

おじさんはそのうち、つと出ていったが、まもなく笑みを浮かべながら戻ってくると「本家のお方、一席設けました故こちらへ」と料理屋へ案内された。

驚いたことに、そこにはおじさんの友人が４名集まっていて、私は床の間を背に座らされて杯の猛攻撃を受け、翌日は完全に仮死状態にあった。

宇和島市は松山市の南西約100キロの所にあり、豊後水道をはさんで九州大分県と向かい合っている人口６万５千人の風光明媚な観光とミカン栽培・真珠養殖の町である。

昼下がりの駅を出ると、９月中旬にもかかわらず35度を越す猛暑のせいか人通りはごく少ない。

タクシーで伊達博物館に向かう。

竹に雀の伊達家の紋が入り口で客を迎える瀟洒な建物である。

ここでは、秀宗を開祖とする宇和島伊達藩の1615年の入部から明治の廃藩置県を迎えるまでを、

いろいろな文書や大名家の生活用具などで説明してある。

当然のことながら、婚姻を含めて奥州伊達藩との交流が連綿と続いていたことがわかる。

博物館を出ると町の中心部にある平山城の宇和島城跡に上った。

宇和島城は別名鶴島城とも呼ばれ、天守閣のみ現存していて国の重要文化財に指定されており、そこから眺めた宇和島湾はリアス式海岸の典型でまさに絶景というべきものであった。

城跡内に小ぶりながら郷土歴史資料館があり、ここには農具や漁具あるいは照明用具、食器など専ら庶民の昔日の生活道具を展示してある。

それらの極く日常の品々が東北育ちの私に何ら違和感を与えなかったのは、あるいは奥州伊達藩の匂いが微かにでも付いているせいではないかと思われた。

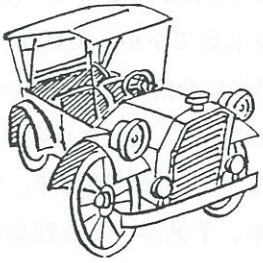
秀宗が入部したとき仙台からは、家来やその家族さてはお抱え商人まで2,000人もの人が付随った。

そのため、宇和島の言葉は今でも周囲の方言と

微妙に異なると言われ、また東北地方に特有の姓が散在し、七夕や八鹿踊りが少し形を変えて伝えられている。

ちなみに宇和島伊達藩の治世は独自の地方文化を育みながら終始穏やかなものであり、幕末には日本の新しい夜明けを高らかに謳いあげた人材を輩出した。

現在、宇和島市は伊達家が取り持つ縁で仙台市、それから玉造郡岩出山町と姉妹都市になっている。

今回の宇和島再訪でも問われた。「オ主ハ何処カラ来タルヤ」

伊達博物館に向かったタクシーの運転手さんに。